

書 評

佐藤光・中澤信彦編『保守的自由主義の可能性
— 知性史からのアプローチ』
(ナカニシヤ出版、2015年10月30日発行)

竹 下 公 視

本書は、保守的自由主義やそれに関連の深い8人の偉大な思想家を取り上げ、その思想の現代世界における可能性に関して、3年にわたって行われた6人の執筆者による共同研究の成果報告書である。まず、序章と補章を含む9章からなる本書の構成を示せば、つぎのようになる。

序 章 現代世界と保守的自由主義

第1章 エドモンド・バーク — 「義務」なき「選択の自由」の帰結

第2章 ジョサイア・タッカー — 宗教・経済・政治

第3章 T・R・マルサス — 農工バランス重視の経済発展論の今日的意義

第4章 マイケル・ポランニー — 保守的自由主義をめぐるオークショットとの対話から

第5章 マイケル・オークショット — 合理主義批判がもたらすもの

第6章 新渡戸稲造 — 戦前期保守的自由主義の一断面

第7章 柳田国男 — 「未来を愛すべきこと」

補 章 ジョン・グレイの自由主義的ホッブズ解釈

あとがき

本書が意図するところは、序章やあとがきにおいて編者によって明示されている。つまり、本書は、知性史や思想史の研究が単なる訓誥学に終わることを防ぐため、日本や世界の現実的課題を意識して、保守的自由主義やそれに関連の深い8人の思想家を取り上げ、8人の偉大な思想家の思想を「いまに蘇らせる」ことを目指して論じられたものである。思想史が専門でない評者の本書に対する最初の印象は、難解なイメージのつきまとう思想史を扱う書籍には珍しく、本書は9つの章いずれもが極めて平易な文章で叙述され、論旨が明快で、かつ

また現代の現実的な問題とも密接に関連づけられているため、極めて刺激的で興味深い内容の論考となっているということであるが、それは取りも直さず、取り上げられた思想家の思想と現代的な課題との関係が自覚的に結びつけられ、深く理解する努力が払われていることの証左であると考えられる。

序章「現代世界と保守的自由主義」では、第1章以降の本論における個別の思想家の検討に先立ち、本書全体の意図と構成が示される。最初に、本書で「保守的自由主義」が取り上げられる出発点となる「現代世界」の理解が示される。言うまでもなく、現代世界を形づくっているのは、西欧近代に始まる産業主義、民主主義、およびナショナリズム（ないし国民国家）の三大価値である。しかし、産業主義と民主主義などからなる「進歩主義」が近代国民国家のなかで推進されてきた結果として、地球環境問題に代表される根源的な諸問題が内外で噴出し、西欧近代にも陰りが見え始めたのが現代世界である。その現代世界において、進歩主義の中核をなす産業主義、民主主義、ナショナリズムの暴走に歯止めをかけ、それらに「グッドフォーム（善い形）」を与えるためのひとつの有力な選択肢として本書で提唱されているのが「保守的自由主義」である。序章では、つづけて「保守主義」ないし「保守的自由主義」という言葉の意味や保守的自由主義思想が兼ね備えるべき特質がまとめられ、最後に上述したような本書の意図と構成が示される。そこでは、「保守的自由主義」ないし「保守主義」は、進歩主義などの行き過ぎを警戒し懐疑する思想として消極的に定義するしかない性質のものであるため、「回帰する時間」ないし「同時存在する時間」、「自生的秩序」、「モンローの支配の下における自由」、「伝統知」・「実践知」・「暗黙知」など、その思想を構成するキーワードが網羅され、そのポイントについての簡潔な解説が加えられている。それらは、本書を読み進める上での最適な指針を与えてくれるが、それにとどまらず「保守主義」ないし「保守的自由主義」の基本を理解する上でも最良の基礎知識を提供してくれる。

さて、本論となる第1章以降の8つの章では、8人の偉大な思想家の思想の輪郭が提示され、その今日的意義が検討される。ここでは、まず各章の内容を順に追って行くことにしよう。

第1章「エドマンド・バーク — 『義務』なき『選択の自由』の帰結」では、「保守主義の父」と称されるエドマンド・バーク（1729/30-1797）が取り上げられる。まず、保守主義に本来的に含まれる自由主義的要素に着目し、彼の市場観・経済的自由観がまとめられる。バークの考える自由は、道徳的義務に基づく自己規律（情念の抑制）によって初めて確保される「人間らしい、道徳的な、規律ある自由」であり、その道徳的義務の源泉は国家（政府）と個人の間には介在する中間集団、とりわけその代表である家族に求められる。つまり、家庭において学び習得された道徳的義務や習俗によって市場の健全な機能が支えられるのであり、決して

てその逆ではないというのが、バークの経済思想の核心である。最後に、こうした考察を踏まえ、現代日本における「家族の変貌」と「学校選択制」の問題を取り上げ、バーク思想の今日的可能性が考察される。家族の変貌・衰退の問題については、バークの自由観・家族観・財産観にしたがって、解決策は家族の持つ「社会の存続にとっての最も基礎的な役割」を社会的に支援するシステムを整備拡張する政策的努力を粘り強く続けることであるが、それは現代日本においてバークにとってのキリスト教および教会に相当するものが何だったのかを根本から問い直すことにもつながってくる。「学校選択制」の問題については、バークであれば、学校選択制も旧来型の公教育にも反対し、「分権と参加民主主義にもとづく学校作り」を支持するだろうが、それが成功する可能性が高いのは、結局、共同社会への義務と責任の習俗が根づいている地域に限定されることになることと結論づけられている。

第2章「ジョサイア・タッカー — 宗教・経済・政治」では、バークと同時代人でイングランド国教会の指導的立場にあったジョサイア・タッカー (1713-1799) の保守的自由主義思想の特徴が論じられる。これまで政治的保守主義と経済的自由主義とを結びつけた思想家として理解されてきたタッカーの思想を、その思想の核心にある宗教的側面を考慮に入れることによって統一的に理解することが試みられている。タッカーにとっては、キリスト教の原理と経済の原理は結びついており、「勤勉と労働」というキリスト教的徳を獲得した人々の増加は必然的に国内の経済的な富裕につながるものであった。また、タッカーは「慈愛心」というキリスト教の徳を重要視する一方で、「自己愛」という「人間本性」の存在を指摘し、それを規制するための政府の役割を期待したが、その際、彼は個々人の自由な選択や活動を許容する政策立案を政府に期待した。ここに「法の支配の下における自由」という保守的自由主義の概念がタッカーのなかに存在することを見出している。さらに、当時イングランド国教会に異議を唱えた指導的人物であるプリーストリーの政府設立論やアメリカ植民地独立論との対比を通して、懐古主義者でも急激な社会変革でもない穏健な自由主義的傾向を持つ保守的自由主義者としてタッカーの特徴が描き出される。最後に、こうしたタッカーとプリーストリーの比較、とりわけ両者の教育に対する考え方の相違を踏まえ、「市民社会に混乱を引き起こさないような教育」というタッカーの言葉を手がかりに、わが国の公教育論における「自由と強制か」の単純な二分法が批判的に考察されている。

第3章「T・R・マルサス — 農工バランス重視の経済発展論の今日的意義」では、人口学者および経済学者として有名なトマス・ロバート・マルサス (1766-1834) を取り上げ、「政治道徳家」としてマルサスを高く評価しているドナルド・ウィンチの研究を導きの糸として、地主階級の代弁者としての保守反動的なマルサス像とケインズ経済学の先駆者としての進歩的なマルサス像とをいかにして統一的に把握するかという問題 (いわゆる「マルサス問題」)

が論じられる。まず、『人口論』における人口波動と歴史認識に示されるマルサスの基本的思考様式を整理した上で、彼の農業保護論が単なる地主階級の利益の代弁ではなく、農業部門の成長を工業部門成長の条件として認識していたことの論理的帰結であり、そのためにマルサスはむしろ農業と商工業との均衡した発展（農工バランス論）と緩やかな成長を提唱していた。さらに彼は、食糧増産のスピードよりも人口増加のスピードが速いため、自然には達成されない農工バランスを人為的な政策的介入によって実現する必要があることを主張していた。マルサスのこうした主張の根底には、経済学的価値と政治的・道徳的価値との適切なバランスを模索し続けた「政治道徳家」としての彼の信念が存在し、ここに保守的自由主義者としてのマルサスの姿が見出されている。最後に、こうしたマルサスの経済発展論の観点から今日のTPP加盟交渉への参加問題を取り上げ、賛成派と反対派の主張がそれぞれ検討され、農業と商工業との均衡した発展を志向している点から前者の賛成派の立場が支持されている。

第4章「マイケル・ポランニー — 保守的自由主義をめぐるオークショットとの対話から」では、社会哲学者としてのマイケル・ポランニー（1891-1976）の思想、とりわけ彼の「保守的自由主義」ないし「自由主義的保守主義」思想の特徴が論じられる。ポランニーと政治哲学者オークショットの「保守的自由主義」を対比したとき、自由社会の存続と発展のために、超越的な価値に対する人々の献身が不可欠であるとするポランニーの自由主義哲学は、グレイによる「普遍的体制実現のための自由主義」と「暫定協定到達を第一義とする平和共存の自由主義」という自由主義の二分類にしたがえば、明らかに前者のタイプに属し、オークショットとは異なる性質のものである。けれども、社会契約が成立するためには単なる功利的計算を超える「貴族の徳」が必要不可欠な要素となるというオークショットのホッブズ解釈のなかには、超越的価値への献身を強調するポランニーの自由主義像との類似性が見えてくる。しかし、カール・シュミットの自由主義国家論批判に照らせば、こうした類似点を超えて、自由主義哲学には「国家権力からの自由」を強調する結果として「自由主義国家をいかにしてつくりあげるか」という「国家権力への自由」に関する議論が弱いという共通の欠陥が存在する。だが、そうした限界にもかかわらず、ポランニー哲学には、多くの近代哲学が陥る思考と行動の相対主義というパラドックスから逃れる仕掛けとして、伝統を通しての絶対的真理への接近という、古代ギリシア哲学に類似した思想的・実践的態度が含まれている。ここに保守的自由主義者としてのポランニーの姿が現れている。

第5章「マイケル・オークショット — 合理主義批判がもたらすもの」では、20世紀の政治哲学者マイケル・オークショット（1901-1990）が取り上げられる。彼は著書『政治における合理主義』に収められた「保守的であること」という論文によって保守主義の研究者

として知られているが、本章はオークショットの合理主義批判を取り上げ、現代社会への提言を読み取ろうとする試みである。彼の合理主義批判の検討に入る前に、まずオークショットの著作のほとんどがエッセイという形式で書かれていることに着目し、文字やマニュアルによる技術の伝承を否定する彼の知識論との関わりが示唆される。その知識論によれば、「知」は伝承可能で教え学ぶことが可能である「技術知」と伝承不可能で伝え習得する必要がある「実践知」の二種類に区別される。オークショットによれば、理性以外の権威を一切認めない合理主義に馴染むはずのない政治の世界において、合理主義が最大の勝利を収めている。自覚された計画と熟考の上に実行される「合理主義の政治」は、「工学と同化された政治」で、「完全性の政治」と「画一性の政治」を特徴とする。そこでは、「実践知」は認められず、「技術知」のみが「知」に値する。しかし、「技術知」と「実践知」の一方を捨て片方のみで知識の体系を形作ることはできない。「技術知」は知識のうちの一部でしかないし、その「技術知」の学習でさえ過去から引き継いできた知識（伝統や慣習）を前提としている。ここにオークショットの合理主義批判の立脚点があり、保守主義的な観点を見ることが出来る。最後に、オークショットのこうした合理主義批判の観点から、いわゆる世襲議員（「二世・三世議員」）を否定する議論の一面性と「合理主義の政治」の傾向の著しい今日のわが国の政治状況が指摘される。

第6章「新渡戸稲造 — 戦前期保守的自由主義の一断面」は、明治から昭和初期にかけて行政家、教育家、政治家として多面的に活躍した新渡戸稲造（1862-1933）を取り上げ、その晩年の言動や活動を追い、戦前期の保守的自由主義の一断面を描き出そうとする試みである。まず、国際連盟事務次長の職を終えた後の1927年以後の新渡戸の自由主義論とマルクス主義批判が検討される。漸進的なイギリス型の自由主義ないし保守的自由主義を学理としてではなく生き方の原則として支持した新渡戸は、その観点から当時大きな影響力を持っていたマルクス主義を批判し、同時に天皇を中心とする国体論を展開した。新渡戸の自由主義（当時の標語では「新自由主義」）は、当時の無産政党運動と国家主義運動の間で「中道と寛容」を標榜するものであったが、その新渡戸の自由主義的思想が満州事変以後に変節したのかということがしばしば問題となってきた。新渡戸の行動や発言を詳細に見ていくと、彼の思考や行動の基本は自由主義の寛容や国際協調の原則を支持し、理想を掲げながらも状況に応じた極めて現実的な発言や行動を行っており、それは最晩年においても変わらなかった。それでも、戦前の自由主義はマルクス主義や軍国主義に敗北し、結果として悲惨な戦争をもたらしたという重い事実は残る。そこに、戦前の失敗を繰り返さないためにも、新渡戸を含む戦前期の自由主義の功績と挫折をさらに検討する価値があることが、最後に指摘されている。

第7章「柳田国男 — 『未来を愛すべきこと』」は、第6章で扱った新渡戸稲造の弟子であ

る柳田国男（1875-1962）を取り上げる。柳田国男は日本民俗学の創始者としての側面のみが強調される傾向が強いが、彼の経済思想や思想一般に焦点を当てると、柳田はまぎれもない保守的自由主義者であった。本章では、こうした保守的自由主義者としての柳田が先の大戦に対してどのような態度を取り、そこから現代のわれわれが何を学ぶことができるのかが、橋川文三の印象的なエピソード（橋川が受けた衝撃）を介して論じられる。それによれば、柳田は、知人の若者の出征に際して「未来を愛すべきこと」という手向けの言葉を認めたという。このエピソードには、不安的な当時の政治経済情勢のなかで社会科学があまりに非科学的であったのに対して、保守的自由主義者としての柳田は共産主義やマルクス主義の革命幻想や日本ロマン主義的な反動（幻想）に陥るのではなく、事物に即して冷静客観的に捉える「醒めた目」を有していたことが示されている。柳田が始めた民俗学は、歴史学というばかりではなく、過去の「善きもの」（「常なるもの」）を現在と将来に生かすための「現代科学」でもあった。ここから、彼が認めた手向けの言葉のなかの「未来」とは、「死者と生者と未生の者との永遠の共同体」という「常なるもの」だったことが理解される。著者は、こうした柳田の態度と哲学者の西田幾多郎のそれとを対比しながら、戦前の日本リベラルが敗れた理由を「社会科学」の欠如に求め、最後に「常なるもの」の存在を信じ、その「社会科学」的な確定に力を注ぎつづけることで、戦前から戦後にかけて思想的におれることなく不転向を貫いた柳田の態度には学ぶべき点が少なくないことを強調し、そこに保守的自由主義者としての柳田を見ている。

補章「ジョン・グレイの自由主義的ホッブズ解釈」では、前章までの歴史や伝統を重んじる「保守的自由主義」の系統に属する思想家ではなく、人間理性に基づく社会契約論の立場から国家の役割を先駆的に論じた思想家のひとりであるトマス・ホッブズ（1588-1679）を取り上げ、現代イギリスの政治哲学者ジョン・グレイの自由主義的ホッブズ解釈に基づき、国家の役割に関するさまざまな問題が論じられている。イングランド海軍がスペインの無敵艦隊を撃破した1588年に生まれ1679年に没したホッブズの政治哲学は、彼が生きた17世紀イングランドの革命の世紀のなかで形成された。極めて強い利己主義的性格を帯びた人間が、自己の利益は最大化しつつも「死の恐怖」を回避するべく構築したより強大な「共通権力」が、ホッブズの言う国家である。ポランニーの自由主義哲学を扱った第4章でも言及したように、グレイは自由主義の伝統を「普遍体制実現のための自由主義」と「暫定協定到達を第一義とする平和共存の自由主義」の2つの系統に分類する。ポランニーは明らかに普遍的原理の実現を目指す前者の自由主義の系統に属するが、グレイ自身はそうした系統の自由主義ではなく平和共存の手段としての「暫定協定」を目指す後者の自由主義を強く支持する立場から、ホッブズをそうした「暫定協定」を中核とする自由主義思想の伝統の元祖として

位置づけ、その功績を高く評価している。こうしたホッブズ理論を通して現代社会を見ると、現在、世界のいたるところに「現代における『自然状態』の存在」が見えてくる。ここにホッブズ理論の意義や保守主義的自由主義の抱える課題が深く関わってくるのが、最後に示唆されている。

以上が、補章を含む8つの章で取り上げられた8人の偉大な思想家の思想についての本書の各章における内容の概要である。本書の最大の特徴は、冒頭でも述べたように、現代の世界や日本における現実的課題を念頭において保守的自由主義者の思想が論じられているだけでなく、こうした保守的自由主義思想と現実の具体的な課題との関わりが実際に考察されているところにある。そのことが明確に現れているのは、第1章のバーク、第2章のタッカー、第3章のマルサス、および第5章のオークショットの思想を扱った章である。また、補章のホッブズの思想を扱った章においては、ホッブズ理論に密接に関わる状況が増大しつつあるように見える今日の世界情勢に関わって、ホッブズ理論と保守的自由主義理論の持つリアリティが論じられている。これらの章で扱われたテーマとしては、家族の変貌や衰退、学校選択制、公教育、TPP問題、世襲議員（二世・三世議員）、合理主義の政治、そして近年の緊迫する中東情勢や東アジア情勢など、まさに現代の現実的課題や問題が幅広く取り上げられている。これらの各章における各思想家の思想と現実の具体的な課題との関連についての考察や言及の程度には若干の差はあっても、いずれの章・課題についてもそれぞれ興味深い内容や有益な指摘が含まれている。その観点から言えば、「研究に緊張感を持たせ、8人の偉大な思想家の思想を『いまに蘇らせる』ことを目指した」という本書の狙いは、十分に達成されているとすることができる。ただ、やはり紙数の制約があるため、扱われた思想家の思想の全体像を正しく理解し、各思想と現代的課題との関わりについての理解を深めるためには、6人の執筆者の他の研究書や論文を参照する必要があるだろう。さらに、その意味での不足する部分を講義担当者が補えば、本書は社会思想史の教科書としても十分に使用可能であると、あとがきで述べられているのは十分に肯けるところである（というより、むしろそういう形で使用されるのが、本書の最良の利用法であるのかもしれない）。

このように、本書は8人の思想家の思想や現代の現実的課題との関わりなど、各章それぞれに興味はつきないが、そのことに加えて思想史に門外漢の評者がもっとも関心を持つのは、「保守的自由主義」ないし「保守主義」思想の輪郭を描き、それを現代の世界や日本の現実的課題との関わりで論じるという本書全体の枠組みである。というのも、本書は保守的自由主義思想ないし保守主義思想のみを論じているのではなく、いわば混沌とした現代世界に「グッドフォーム（善い形）」を与えるための有力な選択肢として保守的自由主義が位置づけら

れているからである。こうした観点から考えるとき、本書の最大の特徴である個別の章で扱われた各思想と個別の現実的課題との関わりの考察は、「保守的自由主義の可能性」をいわば「帰納的に」証明しようとしているものとみなすことができる。そう考えれば、「保守的自由主義の可能性」に関する「演繹的な」証明はどうなるのかという側面が残っている（結局、それは、そもそもなぜ保守的自由主義なのかという問題になる）。この問題に密接に関わってくるのが、序章の「現代世界と保守的自由主義」、および第4章のポランニー、第5章のオークショット、そして第7章の柳田の思想について論じられた内容である。そこでは、「保守的自由主義」は、産業主義と民主主義、さらには人間中心主義、科学主義、技術主義、理性主義、ヒューマニズム、生命至上主義、そしてそれらを一括した「進歩主義」などと同様の主義やイズムではなく、それらの行き過ぎを警戒し懐疑する思想であるとされる。このことは、評者の観点から極めて単純化して示せば、「保守的自由主義」は、産業主義や民主主義、あるいは進歩主義を下位概念（部分）として包摂する上位概念（全体）として位置づけられていることになる。それゆえ、部分概念としての個々の主義やイズムは、全体概念としての保守的自由主義思想のなかで個々の配置や相互の関係が決定される、つまりバランスが斟酌され行き過ぎが是正されるのである。

このように考えれば、「保守主義こそが、現代世界の未来を切り開く可能性をもっている」と考えられるのは、論理的には当然の帰結である（逆に言えば、このように考えなければ、保守主義の大きな可能性は生まれない）。したがって、その主張は、一般論としてはもちろん自然に受容できるし、8人の保守的自由主義者ないし自由主義者の思想の解釈について、とりわけ門外漢の評者には、何ら疑問点は存在しない。しかし、序章やあとがきで示唆される、現代の世界と日本における本書の保守的自由主義の立場については、少なからず疑問が残る。というのは、冷静で客観的な現実把握とその客観的に把握された現実に対する主観的な姿勢や態度とは本来まったく別の事柄であるはずであるが、そこでは、現代の世界や日本の現実についての漠然とした肯定的・楽観的評価（現状追認）から出発していると感じられるところがあるからである。端的に表現すれば、本書における保守的自由主義者ないし保守主義者の思想の把握それ自体にはまったく異論はないが、その思想を現代の世界や日本の現実的課題へ適用するときの、その全体的な枠組みに対しては、果たしてそれで進歩主義におおわれた現代世界に「グッドフォーム（善い形）」を与えることになるのだろうかという、ある意味根本的な疑問が評者には残ってしまうところがある。けれども、本書は6人の執筆者によって著された論文集であるため、各執筆者による微妙な立場や理解の違いも存在し、またそれぞれに与えられた紙数も限られていることもあって、専門外の評者が論旨を読み違えたり誤解したりしているところも多いのかもしれない。その意味でも、各執筆者の著書や論文を

参照する必要がある。

いずれにせよ、本書は、現代の世界や日本で起こっている諸問題の根本に関わる多くの根源的な問いに結びつく、極めて刺激的な内容に富むすぐれた研究書であることは間違いない。多くの読者に一読を勧めたい本である。